

主体的・協働的で創造的な活動を通して、 未来を切り拓くことのできる児童の育成

～個と集団の高まりをめざす特別活動～

あいさつ

校長 吉野 富夫

本校では、平成29・30年度の2年間、熊谷市教育委員会から学習指導研究校として委嘱を受け、「熊谷の子どもたちは、これができる！『4つの実践』と『3減運動』を土台に、研究主題を「主体的・協働的で創造的な活動を通して、未来を切り拓くことのできる児童の育成」として研究を進めてまいりました。

学級会での話し合いを丁寧に積み重ね、実践を通して達成感や成就感を味わうとともに、各教科等の授業での「学び合い」を通して、自己肯定感や自己有用感を育めるように研究に取り組んでまいりました。本日ここに研究の一端を発表させていただきますが、皆様からのご指導をいただき、さらに研究を進めてまいりたいと存じます。

結びに、これまでご指導いただきました熊谷市教育委員会の先生方並びに関係の皆様方にお礼申し上げます、あいさつといたします。

I 研究の概要

1 主題設定の理由

本校の児童は、素直で落ち着いて学習に取り組み、話し合いに対する意欲や折り合いを付ける力は身に付いてきている。しかし、主体的に判断・行動したり、深く考え表現したりすることに課題がある。

そこで、「くまがやラグビー・オリパラプロジェクト」の取組の中で、ラウンドシステムの考え方に基づいた授業改善を図っている。特に、主体的・協働的で創造的な活動を通して、達成感や成就感を味わわせ、自己肯定感と自己有用感を高めることで、研究主題に迫ることとした。



学級会



道徳 学び合い

2 仮説

仮説 1

児童が主体的に活動し、思考を深める学習活動を工夫し、自信をもち考えを表現できるようにすることで、自己肯定感を高めることができるであろう。

仮説 2

問題に気付き、話し合っ解決していく協働的で創造的な学習活動を工夫することで、自己有用感を高めることができるであろう。



色別縦割活動

3 研究の柱

学級活動、各教科とも、下記の2本の柱を軸に研究を進めた。視点と手立てについては、学級活動(1)、学級活動(2)(3)、そして各教科とその学習内容に合わせて設定し、目指す児童像に向けてアプローチした。

柱1 主体的な活動を通して思考を深め、自己肯定感を育む。

視点1 思考を深める話合いにするための指導の工夫

柱2 自他のよさを認め合い、自己有用感を育む。

視点2 ・学級活動(1) 児童が個の存在を支え、認め合う望ましい人間関係を形成する学級会にするための指導の工夫

・学級活動(2)(3) 個が集団の形成者として、集団や自己の課題に向き合い、解決するための意思決定をできるようにする指導の工夫

・教科等 効果的な学び合いをするための指導の工夫

4 全体構想図



5 研究組織

